

保育士・幼稚園教諭に求められる 資質・能力の向上のための取り組み —継続的な活動による学生の成長—

松本香奈*, 位田かつ代*, 森洋子*, 土井のぞみ*, 齋藤陽子*

*岐阜女子大学 文化創造学部

(2016年11月18日受理)

Match of Improvement Storage of the Quality Ability to be Purchased by a Nurture man and a Kindergarten Teacher

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MATSUMOTO Kana, INDEN Kazuyo, MORI Yoko, DOI Nozomi
and SAITO Yoko*

(Received November 18, 2016)

要 旨

本研究は、初等教育学専攻で継続して取り組んでいるミュージカル活動において、保育士・教諭としての資質・能力が学生にどれだけ身に付いたかを明らかにするものである。そのために昨年度より継続的にアンケート調査を実施し、学生の経年変化を捉えた。その結果、継続したミュージカル活動への取り組みを通して、保育士・教諭として向上する資質・能力は、自分の行動への責任、自主的な行動、臨機応変な対応などがあることが明らかとなったので報告する。

I はじめに

「岐女大わくわく劇場」は、本年度で12回目の開催となる。ミュージカル上演活動のねらいは、初等教育学専攻の学生が講義等において修得してきた専門知識や技能、表現力を自らの手で具現化して表現すること、仲間と同じ目標に向かい連携・協力する力を養うことである。本年度も、前年度の12月にはリーダーを決め、テーマ設定や脚本に取り掛かり、7月10日に本番を迎えた。この日を迎えるま

では、ミュージカル上演のみならず、幕間のパフォーマンスや来場者へのお土産作りなど、子どもの年齢や発達を見据えて考えなければならない事柄が多く存在する。この子どもの発達段階を考えて、様々なことを決定していく力は、まさに保育士・教諭としての資質・能力の促進につながることにほかならない。

保育士・教諭に求められる資質・能力は、現在の保育や幼児教育を取り巻く環境の大きな変化に伴いそれ自体も変化している。保育

の専門知識や技術の修得に加え、社会動向を理解する必要もある。さらに、特別支援や保護者支援の方法を学び、地域社会との密接な連携も考慮する多才な人材の育成が望まれている。しかしながら、保育士・教諭になりたいという目標をもって入学した学生の中にも、精神的弱さを内在させていたり、人間関係構築力が弱かったりする学生も垣間見られる。

このような現状を鑑み、本専攻では学生がミュージカル活動を通して自身の人間性を豊かにするとともに保育士・教諭としての資質・能力を向上させ、現場で有用な人材に育て上げるのも保育者養成校の務めであると考え、本活動に取り組んでいる。これは他の養成校においても、総合表現活動としてミュージカルの授業実践(内山, 2016)や、オペレッタの創作活動と公演から、子どもの想像力や表現力を養う活動として授業に取り入れている報告(古屋, 2011・宮本, 2007)があることから養成校における必要性のある活動と言える。

そこで本研究は、このミュージカル活動を通して、初等教育学専攻の学生が保育士や教諭として求められる資質・能力がいかに向上したのか、また向上させるために改善すべきことは何であるのかを明らかとすることを目的としている。それらを明らかにするために、アンケート調査を実施し、その結果から明らかになったことを、今後の指導に活かしていくものである。特に、本研究は昨年度からの継続した研究であるため、昨年度との比較検討に重点を置き、保育士・教諭として求められる資質・能力において向上した力、課題が残っている力を明らかにしていく。

II アンケート調査

アンケート調査内容は、昨年度報告をしている「保育士・幼稚園教諭に求められる資質・能力の向上ための取り組み—ミュージカル上演活動を通じた成果と課題—」(松本他, 2015)の時に活用した内容を踏襲している。更に、昨年度よりも項目数を増加し調査を実施している。昨年度は17項目としたが、今年度は、11項目を追加し、28項目の資質・能力を挙げ、学生に調査を実施した。

これは、昨年度実施した際に、17項目以外にも学生に身に付いている力があることがその後の学生の姿や感想から見えてきたためである。具体的に尋ねた項目は表1のとおりである。

本アンケート調査は、ミュージカル活動前後の状態を調査したものであり自己評価である。ミュージカル活動に参加した1~3年生の学生にアンケート調査を実施している。資質・能力を28項目に示し、学生がミュージカル活動前後で、自身にそれらの資質・能力がどれだけ身に付いたかを4件法で回答するものである。今年度回答した学生は、ミュージカル活動に参加した学生で、106名(1年40名, 2年25名, 3年41名)である。項目ごとに平均値を算出し、比較検討を行った。

表 1 資質・能力を問う28項目

	資質・能力	尺度	備考
(1)	保育士・教諭としての使命感	1-2-3-4	H 27年度と同様
(2)	保育・教育への情熱	1-2-3-4	
(3)	子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力	1-2-3-4	
(4)	子どもの成長・発達への理解	1-2-3-4	
(5)	子どもへの愛情	1-2-3-4	
(6)	保育内容に関する専門的知識	1-2-3-4	
(7)	豊かな教養	1-2-3-4	
(8)	クラス経営への知識	1-2-3-4	
(9)	クラス経営への実践力	1-2-3-4	
(10)	保健衛生の専門的知識	1-2-3-4	
(11)	自分の行動への責任感	1-2-3-4	
(12)	自主的に行動できる力	1-2-3-4	
(13)	豊かな創造力	1-2-3-4	
(14)	何でも挑戦する情熱	1-2-3-4	
(15)	思いやりの心	1-2-3-4	
(16)	報告・連絡・相談を実行する力	1-2-3-4	
(17)	豊かな感性	1-2-3-4	
(18)	子どもが好き	1-2-3-4	
(19)	心身の健康	1-2-3-4	
(20)	子どもの行動を受容し認める力	1-2-3-4	
(21)	適切な心情理解と遊び・生活の援助	1-2-3-4	
(22)	的確な判断力	1-2-3-4	
(23)	臨機応変な行動力	1-2-3-4	
(24)	笑顔がある	1-2-3-4	
(25)	子どもの目線に立てる	1-2-3-4	
(26)	教育・保育実践に関する研究と自己研鑽の力	1-2-3-4	
(27)	運営において全体を見通し支える力	1-2-3-4	
(28)	子どもの意欲を高める能力	1-2-3-4	

※尺度 1：全く身に付いていない 2：あまり身に付いていない 3：まあ身に付いた 4：とても身に付いた

Ⅲ アンケート結果と考察

(1) H28年度 1～17項目の結果

①1年生

1年生で数値の伸びが大きかったのは、項目1「保育士・教諭としての使命感」(1.00ポイント)、項目2「保育・教育への情熱」(0.93ポイント)、項目3「子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力」(0.98ポイント)、項目9「クラス経営への実践力」(0.80ポイント)、項目11「自分の行動への責任感」

(0.83ポイント)、項目12「自主的に行動できる力」(1.00ポイント)、項目14「何でも挑戦する情熱」(1.00ポイント)であった(表2・図1)。

最も伸びているのが、項目1, 12, 14と3項目あった。1年生にとって本活動は入学後すぐに短期間で取り組むものであり、内容等も教員側から提示・指示することが多い。そのため、活動前はその意義を十分に理解できずに言われたことをやっているという感覚が大きかったと思われる。しかし、先輩の姿を見

表2 H28年度1年生結果

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17
上演前	2.28	2.65	2.03	2.23	3.08	1.95	1.98	2.08	2.05	1.93	2.68	2.35	2.38	2.43	2.85	2.45	2.45
上演後	3.28	3.58	3.00	3.00	3.65	2.70	2.75	2.80	2.85	2.40	3.50	3.35	3.15	3.43	3.48	3.20	3.20
前後の差	1.00	0.93	0.98	0.78	0.58	0.75	0.78	0.73	0.80	0.48	0.83	1.00	0.78	1.00	0.63	0.75	0.75

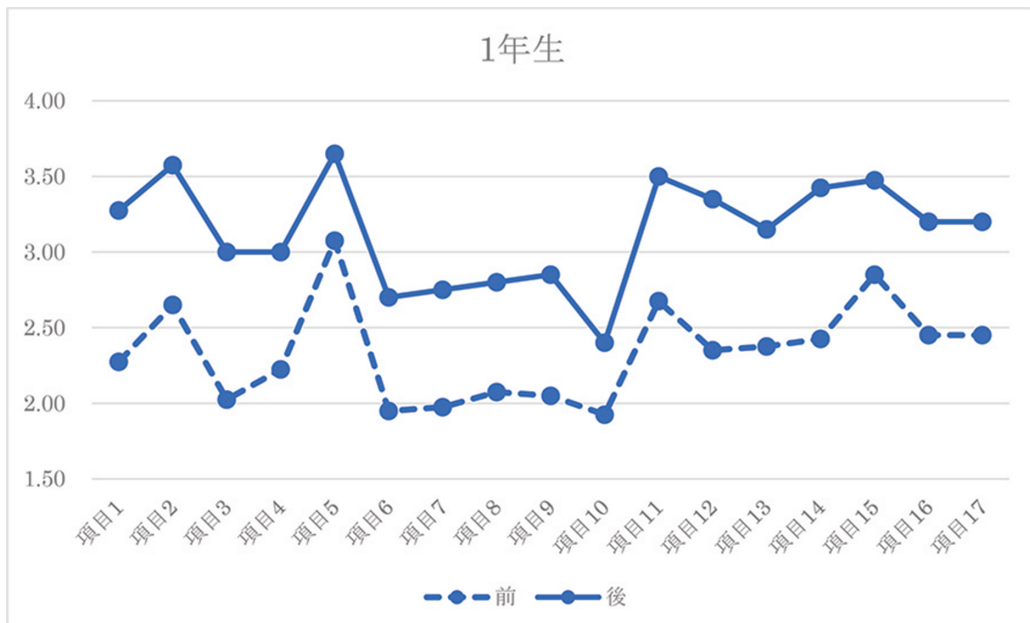


図1 H28年度1年生の結果

たり直接指導を受けたりすることで、活動への取り組み方が変わり、やるからには良いものを作りたいという思いへと変わっていったと考えられる。

②2年生

2年生で数値の伸びが大きかったのは、項目1「保育士・教諭としての使命感」(0.84ポイント)、項目3「子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力」(0.88ポイント)、項目11「自分の行動への責任感」(0.92ポイ

ント)、項目12「自主的に行動できる力」(0.80ポイント)、項目16「報告・連絡・相談を実行する力」(0.88ポイント)であった(表3・図2)。

最も伸びが大きかった項目11は、本活動中に、一人一人に与えられた役割の大きさを考える機会が多かったと思われる。3年生からの指導や真剣に取り組む姿を目の当たりにしたこと、1年生に指導する立場となったことがこの結果に繋がっているのではないだろうか。

表3 H28年度2年生の結果

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17
上演前	2.60	2.92	2.16	2.40	3.24	2.16	2.28	2.12	1.96	1.96	2.76	2.64	2.44	2.76	2.84	2.44	2.60
上演後	3.44	3.56	3.04	2.92	3.84	2.60	2.88	2.80	2.72	2.12	3.68	3.44	3.20	3.36	3.56	3.32	3.00
前後の差	0.84	0.64	0.88	0.52	0.60	0.44	0.60	0.68	0.76	0.16	0.92	0.80	0.76	0.60	0.72	0.88	0.40

2年生

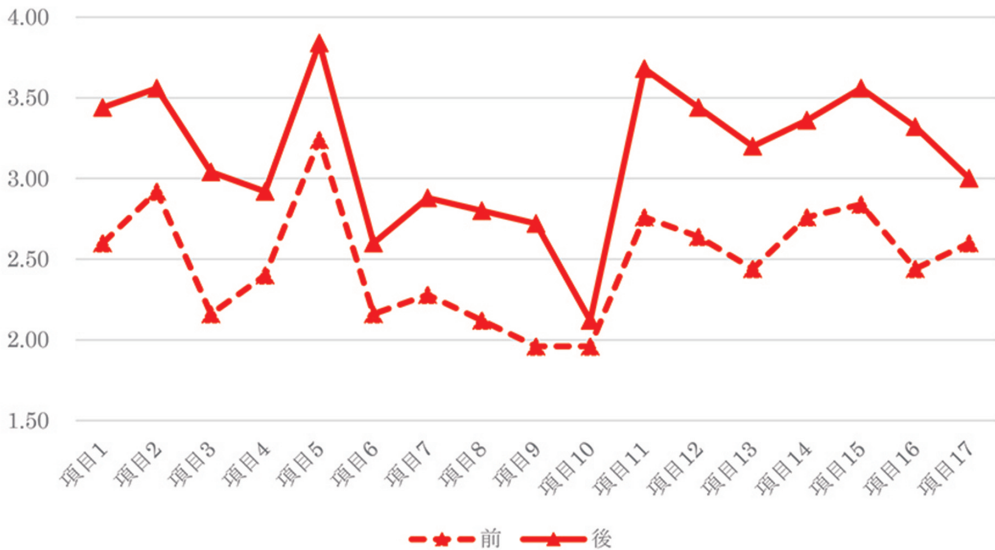


図2 H28年度2年生の結果

③3年生

3年生で数値の伸びが大きかったのは、項目3「子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力」(0.94ポイント)、項目9「クラス経営への実践力」(0.80ポイント)、項目11「自分の行動への責任感」(0.94ポイント)、項目12「自主的に行動できる力」(0.90ポイント)、項目13「豊かな創造力」(0.86ポイント)、項目14「何でも挑戦する情熱」(0.91ポイント)であった(表4・図3)。

最も伸びが大きかった項目11は、本活動

の最上級生として後輩に指導する中で、自分自身の行動を振り返る機会が多かったと思われる。自分自身への厳しさは本活動への主体的な取り組みの表れであり、この姿は後輩の手本となる。後輩に厳しく指導する場面もあったが、それは自分もそれだけ真剣に取り組んでいるからこそできることである。

④学年間の比較

全学年に共通して伸びが大きかった項目は11と12であった。学生が様々な活動を主体

表4 H28年度3年生の結果

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17
上演前	2.74	3.03	2.47	2.61	3.50	2.16	2.34	2.24	2.11	1.87	2.76	2.74	2.58	2.61	3.08	2.74	2.68
上演後	3.49	3.63	3.41	3.12	3.80	2.63	2.85	2.95	2.90	2.44	3.71	3.63	3.44	3.51	3.73	3.51	3.41
前後の差	0.75	0.61	0.94	0.52	0.30	0.48	0.51	0.71	0.80	0.57	0.94	0.90	0.86	0.91	0.65	0.78	0.73

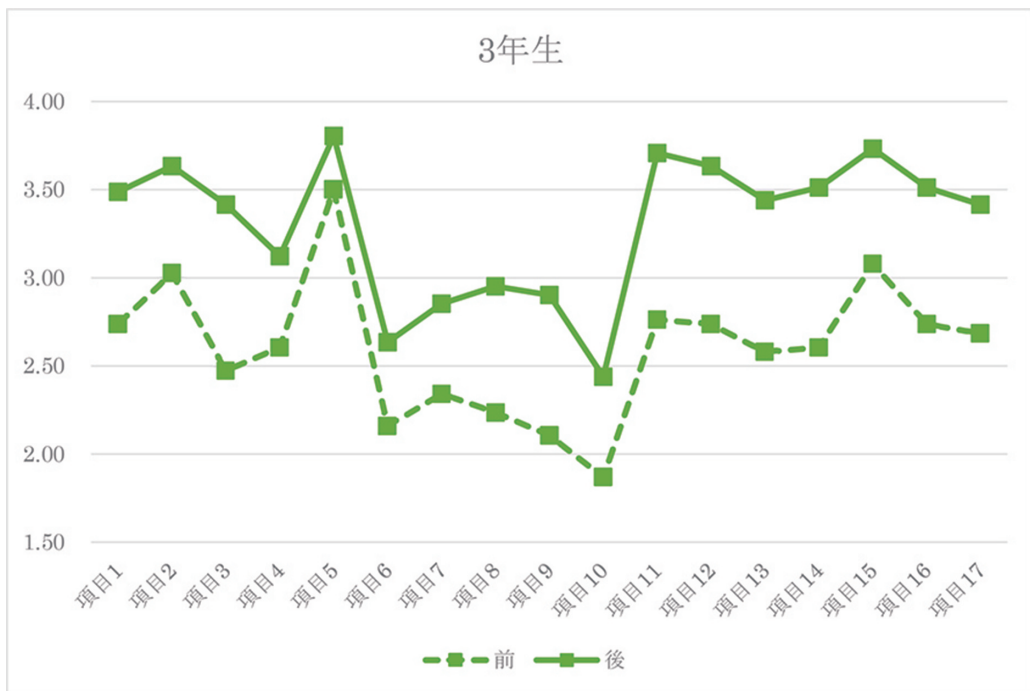


図3 H28年度3年生の結果

となって進めていくことが保育士・教諭に必要な資質であると考えており、本活動を通して自主的に行動したりその行動に責任を持ったりすることができるようになったことは有意義なことである。

1年生だけ伸びが大きい項目は項目2, 2年生だけ伸びが大きい項目は項目16, 3年生だけ伸びが大きい項目は項目13であった。

1年生にとっては、子どものことを考えて何かを作ったり子どもと直接関わったりすることは、入学後本活動が最初となる。入学時に保育や教育について「勉強したい」という思いを抱いてはいたが、すでに専門の学修をしたり体験学習や実習を経験したりしている2, 3年生に比べると思い(情熱)は低い。そのため、本活動を経てその思い(情熱)が一気に高まったと考えられる。

2年生は昨年度もこの項目は大きく伸びていた。しかし、その要因は少し異なると考えている。用意されているものを短期間で行った昨年度とは違い、今年度はすべて自分たちで考え、時間をかけて準備を行った。その間、同学年で意思疎通が非常に重要であると実感する場面が多かったと思われる。何度も話し合いを行い、時には思いがすれ違うということを経験したことで、「報告・連絡・相談を実行する力」が重要であり、身につけられたと感じたと思われる。

3年生は学修を重ね、昨年度のミュージカル、教育実習を経験したこともあり、「創造力」の重要性を感じていたと思われる。本活動ではまさしく“子どものことを想像し、子どものために創造する”ことが求められる。これまでの積み重ねと本活動との相乗効果によるといえる。

(2) H28年度 18～28項目の結果

昨年度実施の17項目に、今年度は11項目

を追加してアンケートを実施した。表1にも示したが、改めて追加項目を提示する(表5)。

表5 H28年度追加項目

(18)	子どもが好き
(19)	心身の健康
(20)	子どもの行動を受容し認める力
(21)	適切な心情理解と遊び・生活の援助
(22)	的確な判断力
(23)	臨機応変な行動力
(24)	笑顔がある
(25)	子どもの目線に立てる
(26)	教育・保育実践に関する研究と自己研鑽の力
(27)	運営において全体を見通し支える力
(28)	子どもの意欲を高める能力

これは、藤尾ら(2010)の論文を参考に追加したものである。以下、この11項目について、学年毎及び学年間の比較を行い、検証する。

全学年で伸びが最も大きかったのは、項目23「臨機応変な行動力」で、1年生0.90ポイント、2年生0.84ポイント、3年生0.81ポイントであった。練習を重ねる中で生じる変更に柔軟に対応する場面がいくつもあり、その都度協議してより良いものへと創り上げていったことが、全学年に共通していることといえる。

学年毎に見てみると、1年生は2年生と同じ項目(22:0.95ポイント, 25:0.93ポイント, 27:0.88ポイント)の伸びが大きいとともにそれだけでなく、他に項目24「笑顔がある」(0.93ポイント)、項目28「子どもの意欲を高める能力」(0.93ポイント)も伸びが大きかった。1年生は入学後すぐにミュージカルの活動を行い、活動自体をイメージできない状態で取り組むことになること、また専門の学修を始めたばかりであることから、不

表6 H28年度追加項目学年間比較

	項目18	項目19	項目20	項目21	項目22	項目23	項目24	項目25	項目26	項目27	項目28
1年生 上演前	3.45	2.80	2.43	2.25	2.13	2.30	2.63	2.50	2.08	2.03	2.10
1年生 上演後	3.70	3.00	3.20	2.88	3.08	3.20	3.55	3.43	2.83	2.90	3.03
前後の 差	0.25	0.20	0.78	0.63	0.95	0.90	0.93	0.93	0.75	0.88	0.93
2年生 上演前	3.52	2.56	2.52	2.20	2.36	2.36	3.08	2.48	2.12	2.16	2.20
2年生 上演後	3.76	2.88	3.12	2.60	3.16	3.20	3.60	3.32	2.60	2.96	2.84
前後の 差	0.24	0.32	0.60	0.40	0.80	0.84	0.52	0.84	0.48	0.80	0.64
3年生 上演前	3.71	2.97	2.92	2.55	2.63	2.55	3.16	2.92	2.26	2.37	2.50
3年生 上演後	3.88	3.12	3.49	3.07	3.12	3.37	3.59	3.56	2.80	3.00	3.10
前後の 差	0.17	0.15	0.57	0.52	0.49	0.81	0.43	0.64	0.54	0.63	0.60

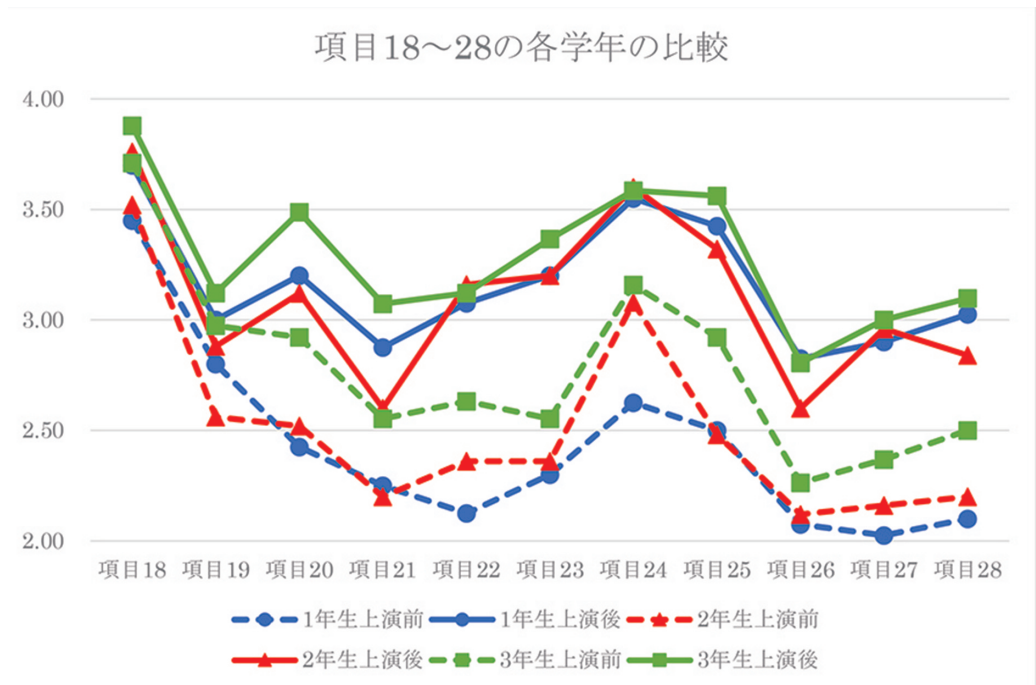


図4 H28年度追加項目学年間比較

安が大きいことが上演前の数値の低さに繋がっていると思われる。その後、活動を通して先輩の姿に刺激を受け、本番で子ども達の反応を目の当たりにすることで評価が高くなると考えられる。

2年生は項目23以外に、項目22「的確な判断力」(0.80ポイント)、項目25「子どもの目線に立てる」(0.84ポイント)、項目27「運営において全体を見通し支える力」(0.80ポイント)の3項目の伸びが大きかった。項目25は後述するが、項目27については3年生がリーダーとなる活動のため、2年生は運営という立場での考えは活動当初はあまり持っていなかったと思われる。しかし、活動の中で「来年度は自分たちがリードする」ということを考える機会があり、全体を見渡すこと、自分がすべきことを考えることにつながっていったといえるだろう。

3年生において項目23以外は他の学年に比べると伸びが大きい結果は得られていない。上演前の数値が元々他の学年より高いということもあるが、実習など諸活動を多く経験することにより自己評価が厳しくできるようになり、さらに高めていかないといけないと感じているということも考えられる。

上演前の数値に着目すると、3年生の回答で他の学年より高い数値となっているのが、項目20「子どもの行動を受容し認める力」と、項目25「子どもの目線に立てる」であった。これらは、専門の学修を積み重ねてきたことや、実習等での経験が大きく関わっていると考えられる。2年生は1年生より専門の学修を多くしているが、実際に子どもと接する機会はボランティア活動等限られていることで、1年生と同じような数値であったと考えられる。3年生は実習で子どもと関わり、実際に保育活動を主となって実施する中で子ども理解を深めていることがうかがえる。上

演後に全学年とも数値が伸びており、特に1、2年生の伸びが大きいことから、当日の駐車場から会場への案内、受付、会場内での対応、演目への子どもの反応を経験し、直接来校者と関わる経験が有意義な学修になっていると考えられる。項目23・27についてもいえることであろう。

上演後に着目すると、2年生が他の学年より低い数値のもの(項目19, 20, 21, 25, 26, 28)がある。特に低いのは、項目21「適切な心情理解と遊び・生活の援助」(1年生2.88, 2年生2.60, 3年生3.07)、項目28「子どもの意欲を高める能力」(1年生3.03, 2年生2.84, 3年生3.10)であった。演目は違うが、どの学年も子ども達に伝わるように、子ども達が楽しめるようにと工夫していた。しかし2年生が低いのは、ミュージカル活動の取り組みをみていると、仲間同士の意見の食い違い等が他の学年よりも強く見られていたことが考えられる。そのことから仲間の中でも楽しませながら活動することに苦勞をしていたことという態度が関わっているのではないかと推察できる。

(3) H27年→28年の現2年と現3年の経年変化

①現2年生の1～17項目経年変化結果(昨年の1年生は本年2年生となる。以下、「現2年生」とする)

現2年生は、昨年4月に1年生として入学式を迎え、入学式後間もなくからミュージカル活動に取り組んだ。これは前年度実施したアンケート調査での要望に対応したためである。1年生として、裏方ではなくキャストや衣装・美術などに取り組みたいという意見を取り入れ、試験的に実施した。しかし、1年生は、入学後3か月でミュージカル本番を迎えることになり、ほとんどの学生が不安感を

表7 現2年生のミュージカル上演前後の経年変化 (平成27年度1年生→28年度2年生)

現2年	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17
27年1年ミュージカル上演前	2.29	2.97	2.10	2.26	3.23	2.16	2.16	2.00	1.94	1.77	2.55	2.61	2.39	2.55	2.74	2.65	2.52
28年2年ミュージカル上演前	2.60	2.92	2.16	2.40	3.24	2.16	2.28	2.12	1.96	1.96	2.76	2.64	2.44	2.76	2.84	2.44	2.60
27年1年ミュージカル上演後	3.26	3.71	2.97	3.13	3.68	2.77	2.94	2.90	2.84	2.35	3.71	3.58	3.17	3.48	3.58	3.52	3.45
28年2年ミュージカル上演後	3.44	3.56	3.04	2.92	3.84	2.60	2.88	2.80	2.72	2.12	3.68	3.44	3.20	3.36	3.56	3.32	3.00
1年上演前と2年上演後の差	1.15	0.59	0.94	0.66	0.61	0.44	0.72	0.80	0.78	0.35	1.13	0.83	0.81	0.81	0.82	0.67	0.48

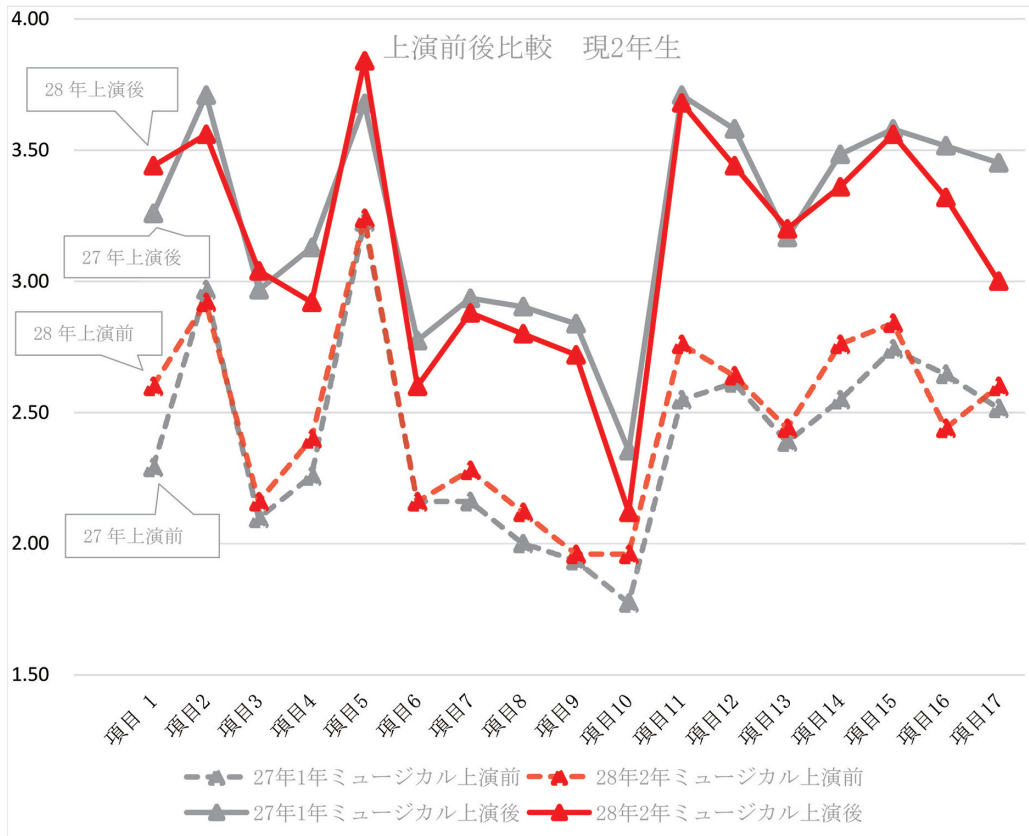


図5 現2年生のミュージカル上演前後の経年変化 (平成27年度1年生→28年度2年生)

抱えてのスタートを切っている。1年生も、本来であれば脚本作りから手掛けることになるのだが、短時間で作り上げるため、学生主導ではあるが教員もある程度補佐しながらの活動となった。今年度は2年生となり、昨年の経験はあるが自分達でテーマ設定や脚本作り、衣装や美術などリーダーを中心にそれぞれ

の部署に分かれ、1からのスタートで活動を進めていくことになる。

現2年生が昨年と今年のミュージカル活動に参加し、2年間でどの項目の伸びが大きかったのか比較をする(表7・図5)。最も高かった順に抽出すると、項目1「保育士・教師としての使命感」(1.15ポイント)、項目11

「自分の行動への責任感」(1.13ポイント),
項目3「子どもの思いや願いを的確に捉える
洞察力」(0.94ポイント), 項目12「自主的
に行動できる力」(0.83ポイント), 項目15
「思いやりの心」(0.82ポイント)であった。

年の2年生は本年3年生となる。以下,「現
3年生」とする)

現3年生は, 昨年2年生で初めて本格的に
ミュージカル活動を行う。1年次は, 入学後
3か月であり練習期間の短さから, ミュージ
カル活動も土産作りや駐車場係り, 受付, 会
場係など担当し, 裏方としてミュージカル活

②現3年生の1~17項目経年変化結果(昨

表8 現3年生のミュージカル上演前後の経年変化(平成27年度2年生→28年度3年生)

現3年	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17
27年2年ミュージカル上演前	2.16	2.62	2.00	2.22	3.03	1.92	2.16	2.03	1.86	1.73	2.49	2.41	2.57	2.46	2.68	2.49	2.62
28年3年ミュージカル上演前	2.74	3.03	2.47	2.61	3.50	2.16	2.34	2.24	2.11	1.87	2.76	2.74	2.58	2.61	3.08	2.74	2.68
27年2年ミュージカル上演後	3.08	3.27	2.89	3.00	3.65	2.68	2.92	2.84	2.62	2.19	3.51	3.24	3.32	3.38	3.49	3.43	3.43
28年3年ミュージカル上演後	3.49	3.63	3.41	3.12	3.80	2.63	2.85	2.95	2.90	2.44	3.71	3.63	3.44	3.51	3.73	3.51	3.41
2年上演前と3年上演後の差	1.33	1.01	1.41	0.91	0.78	0.72	0.69	0.92	1.04	0.71	1.22	1.23	0.87	1.05	1.06	1.03	0.79

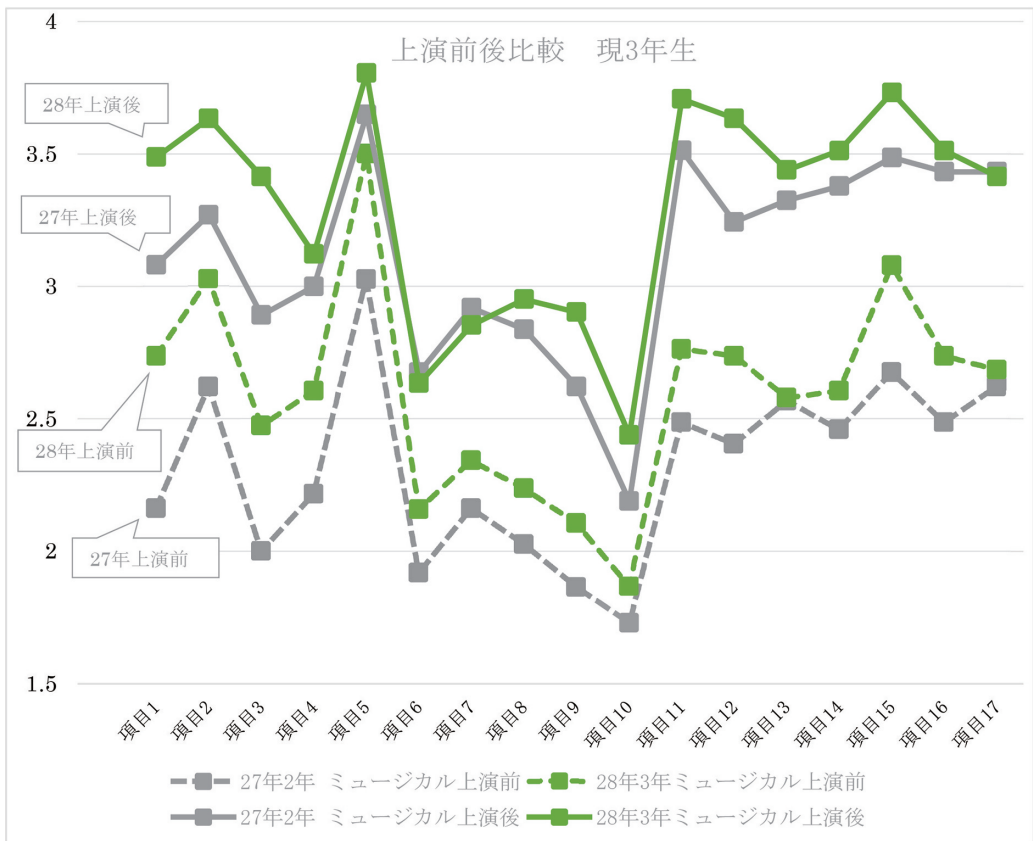


図6 現3年生のミュージカル上演前後の経年変化(平成27年度2年生→28年度3年生)

動に参加している。しかし、来場者の前に立って何かを発表する・表現するという機会はなく、2年生で初めて脚本や衣装、背景、キャストなど自分たちで1から企画・運営することを経験した。そして、3年生となった今年度は、自分達の学年だけでなく、後輩1・2年を指導する立場になった。

現3年生は2年間のミュージカル活動に参加していることから、どの項目の伸びが大きかったのか比較をする(表8・図6)。最も高かった順に抽出すると、項目3「子どもへの思いや願いを的確に捉える洞察力」(1.41ポイント)、項目1「保育士・教諭としての使命感」(1.33ポイント)、項目12「自主的に行動できる力」(1.23ポイント)、項目11「自分の行動への責任感」(1.22ポイント)、項目15「思いやりの心」(1.06ポイント)であった。

現3年生は、昨年2年次のミュージカル活動前と後の平均値をみると、全ての項目において活動後が高くなっている。今年度のミュージカルアンケートにおいても、項目6「保育内容に関する専門的知識」・項目7「豊かな教養」以外の項目は、活動前より活動後が高い。

(4) 経年変化に関する考察

現2年生は、2年間のミュージカル活動で「保育士・教師としての使命感」が強くなってきている。これは、将来を見据え自分の夢への実現の第一歩として捉えていることが理解できる。保育士や教師になりたいという強い意志の表れととれる。また全員で一つの活動に取り組むので、当然ではあるが「自分の行動への責任感」が高くなっている。さらに、脚本作成やキャストとして表現する活動、あるいは係りの仕事も、来場する子どもたちの年齢を考慮し、子どもを楽しませる工夫や

子どもの気持ちになりきらないと楽しんでもらえないことに気付いていくことから「子どもの思いや願いを的確に捉える洞察力」の順になったと考えられる。

現3年生は、3年間のミュージカル活動経験がある。1年生は裏方としての参加である。本格的な活動を経験するのは2年生からであるが、今回の結果から言えることの一つは、裏方として活動したからこそ「保育士・教師としての使命感」より「子どもの思いや願いを的確に捉える洞察力」が高くなったことである。子どもたちを迎え入れる者としての配慮や準備、心構えなどの重要性を高く認識している結果でもある。これは、保育実習や幼稚園教育実習など数回の実習を経験したことも大きく関わっている。実際に子どもたちと長期間接することにより、頭で考えたように保育活動がスムーズに進むわけではないことや、子どもの年齢や発達特徴、興味や関心は何であるかを把握することの必要性を学んできたからだと思われる。日々成長する子どもの姿を目の当たりにしたからこそ、子どもに対する理解が深まり、子どもが主役となるミュージカル活動、子どもが楽しめるミュージカルを考えられるようになってきている。

2年生と3年生の違いは、グラフに顕著に表れている。2年生は1年次のミュージカル上演前後の数値と大きな差がなく、グラフは重なっている。2年目であるにもかかわらずリセットされているような値である。一方の3年生は、3年目となり明らかに上演前の数値が2年次より上がっている。そこからのスタートであるので、当然上演後の数値も2年次に比べて高い。2年間のグラフは重なることなく、きれいに分かれている。これはどのようなことが要因としてあるのか。2年生と3年生の差は、単に保育・幼稚園教育実習等の経験の差だけでなく、ミュージカル活動を、

毎年経験することにより積み重なる部分が大
きいと考ええる。

まさに、“継続は力なり”の活動であると
言える。

IV まとめ

昨年度のアンケート結果も踏まえ、本活動
の有用性について考察する。

まず初めに、項目5「子どもへの愛情」、
項目18「子どもが好き」は、元々の数値が
高いため、伸びがそれほど大きくならない。
保育士・教諭を目指す学生たちであるため、
子どもに対する愛情はすでに持っている。そ
れでも、上演後はさらに高い数値となってい
ることから、本活動で子どものことを考えたり
実際に子どもと接したりすることが、「先
生になりたい」という気持ちを高めることにも
繋がっていると思われる。

そして、この子どもへの愛情に専門的な知
識や実践力が加わることで、保育士・教諭と
しての資質・能力がより確固たるものにな
る。それでは、本活動ではどのような資質・
能力が高まったか。今年度の結果から、全学
年に共通して向上しているのは、項目11「自
分の行動への責任感」、項目12「自主的に行
動できる力」、項目23「臨機応変な行動力」
であった。経年変化の結果も含めると、項目
1「保育士・教諭としての使命感」、項目15
「思いやりの心」も継続することにより高まっ
ていることがわかる。

集団活動における自分の言動の重要性、主
張することと認め合うことのバランスを実感
している。そして集団活動の円滑さは活動目
標を見失うことなく自己責任を果たすと同時
に他の動きと調整しながら進めていく力が身
についたのではないか。他の活動や教育・保
育実習においても必要とされることであり、

ここで向上したものを今後継続していくこ
とが本専攻として取り組むべきことの一つで
ある。

一方、向上がみられにくいのは、項目6「保
育内容に関する専門的知識」、項目10「保健
衛生の専門的知識」、項目19「心身の健康」、
項目21「適切な心情理解と遊び・生活の援
助」、項目26「教育・保育実践に関する研究
と自己研鑽の力」であった。

項目6（1年生2.60, 2年生2.70, 3年生2.
63）、項目10（1年生2.40, 2年生2.12, 3年生
2.44）、項目26（1年生2.83, 2年生2.60, 3年
生2.80）は全学年とも低かった。項目6につ
いて学生は、ミュージカルという表現活動が
保育内容の表現領域と深くかかわっているこ
とが分かるが故に、自己評価として厳しく捉
えているということも考えられる。項目10
は本活動では保健衛生に関することに関わる
機会は少ないといえる。そのため、本専攻の
もう一つの大きな柱である稲作研究会の活動
によって向上することができるとと思われる。
項目26は「研究」や「自己研鑽」という言
葉が本活動と直接的に関連しなかったのかも
しれない。演目を構成する際、“子どもがわ
かりやすいように工夫”したり、“様々なア
ドバイスをもとに練習”したりすることがこ
れにあたると考えていたが、学生にはその部
分が伝えきれていなかったのかもしれない。

今回の報告をまとめる中で、本活動を継続
することの重要性を再認識した。経年変化で
も述べたように、3年生の数値は上演前でも
すでに高くなっている。講義での学修や実習
経験との相乗効果もあるが、学生主体である
本活動では、より自分（たち）で考えて行動
しなければならないことが多い。そのような
過程があるからこそ、活動を終えて資質・能
力を高めることができたと自覚できるのだら
う。本報告で明らかになった資質・能力の高

まりは今後も継続的に活動することによって、より高められるよう取り組んでいきたい。一方、高まりに至らない資質・能力はその内容をさらに精査し、本活動で向上させられるものは指導の中に組み込み、他の学修や活動とも関連させていきたい。

V おわりに

初等教育学専攻として継続して取り組み4年目を迎えた本ミュージカル活動である。2年間の継続した保育士・教諭としての資質・能力向上にかかわる調査結果を通して、自分の行動への責任、自主的な行動、臨機応変な対応の資質・能力、保育士・教諭としての使命感、思いやりの心が向上することが明らかとなった。これは、保育士・教諭に限らず社会人として必要な資質・能力ともいえる。しかし保育士や教諭という仕事の専門性、子どもに対応していくことを考えると、より一層重視される資質・能力である。これらが高まっていくことが明らかとなり、本活動の意義が見出されている。したがって、今後も本活動を通して、それらの資質・能力の向上をより一層図り、様々な場面でそれらの力が活

用できていくよう指導を継続していきたいと考える。

参考文献

- ・内山尚美「保育者養成校における総合表現活動の取り組み：「ミュージカル」の授業実践を通して」東海学院大学短期大学部紀要(42), 59-65, 2016
- ・古屋祥子, 沢登美美子, 高野牧子「保育者養成校におけるオペレッタ創作活動の教育的効果：2011年度「総合表現演習」の実践から」山梨県立大学人間福祉学部紀要7, 31-48, 2012
- ・宮本智子「保育者養成校におけるオペレッタ授業の効果：表現力の観点から」国際学院埼玉短期大学研究紀要28, 19-27, 2007-03
- ・藤尾淳子, 古川雅文, 浅川潔司「幼稚園教員の資質能力に関する研究—幼稚園教諭, 保護者, 園長の力量観の比較から—」学校教育学研究第22巻, 2010, pp. 13-21
- ・林悠子, 森本美佐, 東村知子「保育者養成校に求められる学生の資質について—保育現場へのアンケート調査より—」奈良文化女子短期大学紀要43, 2012, pp. 127-134
- ・後藤範子「4年制大学における保育士養成教育と資質能力向上に関する一考察」東京家政学院大学紀要第51号, 2011, pp. 23-30